

挾ミ抜テコレヲ振ルニ、竹ヲ振ルヨリモ輕ゲナリ、一年薩師豐後ヲ攻ル時身方敗走ス、一祐怒聲ヲ揚ゲテ、恥シメ勵セドモ、猶披靡ヒテ不已、一祐疾退テ、土橋ノ前ニ當テ、三間秘ノ鎗ヲ握リ、鎗ノ胸ニ當テ、曳ト云聲トトモニ推還セバ、三四十人ノ者後足ニナリテ、推還サル、コト二十步計、一祐大ニ呼テ曰、我此ニアラバ、此橋ヲ涉スベカラズ、此橋ヲ涉サズバ、折節秋水漲テ底ヲ不知、此ニ墮テ溺死セントスルカ、敵モ人ナリ、我モ人ナリ、怯者負テ勇者勝ノミ、何ゾ父祖ノ姓ヲ汗シ子孫ニ辱ヲ遺ス事ヲ不思ヤト、跳リ上リ地ヲ踏ナラシテイサメ立レバ、皆引還シ擊テ薩師ヲ却ケタリ、

〔備前老人物語〕岐阜の戦城のかた、かけまけて、城中へ取こむとき、津田藤三郎といふもの殿したり、門をうちたればこゝあけといふ、番のものども門をあけなば、寄手付入にやすべき、壁を乘て、入給へといふ、藤三郎聞て、かく取こむだに、口惜きに、壁をのりにげこむこと見ぐるしき事也、是にて尋常に打死すべし、皆々見物せよといひて、馬より下りて、鎧とりなをし、足拍子を踏てたちたり、さても見事なるふるまい哉、かゝる兵を目前に、うたすべきにあらず、いざ、せ給へとて、門をひらきて、いれけり後に、津田將監といひしはこれなり、

〔常山紀談六〕東照宮小牧に陣しておはしませしが、秀吉兵を分ち申入すと聞し召敵の迹に従うて向はせ給ふ、小牧には石川伯耆守數正、酒井左衛門尉忠次、本多平八郎忠勝を残させ給へり、然るに秀吉大軍を出して、長久手に向はれけるを見て、忠次は秀吉の本陣樂田へ押寄、火をかけて攻撃べしと云けれども、石川、秀吉後に變有と聞て、彌怒られなんと、強て押へて止りけり、忠勝は秀吉の馬亥るしを見るより、僅に五百計引具し、小牧をかけ出、小川一筋隔て、秀吉に相ならび、長久手として馳向ふ、路にて足輕を進め、鐵炮を打かけ、一軍せんとすれども、秀吉見ざる體にて取合す、龍泉寺の前にて、忠勝馬を川に打入口を洗ふ秀吉あの鹿の角の立物の胄を著たるは大將